

今北洪川老師の至誠論

PDF

田 中 寛 洲

序

一、至誠 第十五則（『禅海一瀾』より）

二、性誠の論（『蒼龍広録』より）

結び

序

いまきたこうせん

今北洪川老師はその名著『禅海一瀾』の卷之下「至誠 第十五則」において、儒教の核心である「至誠」について論じ、更にのちに「性誠の論」という一文を表わした。ここには、儒者の身で禅の道に入った老師ならではの深い洞察が垣間見られる。

そこで「至誠」について、『禅海一瀾』（盛永宗興訳・柏樹社刊）の当該箇所と「性誠の論」（『蒼龍広録』卷二・二丁表、拙訳）をおおかたご紹介して、大方のご参考に供したいと思う。

一、至誠 第十五則（『禅海一瀾』より） 現代語訳

『中庸』にいう、「至誠息むこと無し」と。

至誠の徳とはなんと広大なものであろう。天地に行き渡って、しかも天地に拘泥せず、万物としつくり合って、しかも万物に左右されない。寂然として不動の中より出て、しかも感応して天下の諸事に通じてゆき、全てにわたって止むことがない。

その本体は、如何なる因縁をも拠り所とせず、如何なる法をも立場としないで、しかもその働きは、如何なる因縁やものをも明々歴々として味まさない。例えば、天地の至誠とは、鳥は春に鳴き、雷は夏に鳴り、虫は秋に鳴き、風は冬に鳴るようなものである。それはいささかも（私意をもつて）欺くことがなく、循環して止むことが無い。止むことが無いから悠遠であり、悠遠であるから高明である。かかる至誠とは一体どのようなものなのかは、ただ自らにとつて返して自得しなければならぬ。

『中庸』にはまた「至誠は純一である。その純一より全てのものを生ずるが、何故そうなるかは（人知をもつてしては）測ることが出来ない」といい、さらにまた「知・仁・勇の三つは天下の達徳である。これを実践するのはひとつの至誠である」といつている。それ故、私も常に「（法華経には唯一乗のみあって、他に二も三もなしとあるが）孔門もまた、この至誠の一乗の法のみあって、他に二も三もありはしない」といつている。私は昔、見性の後、この「至誠」

の一語をもって、心境しんきょうを練りに練り、磨きに磨いた。その鍛錬によって、正念工夫相続の力を養うことが出来た。その恩は報いようも無く大きい。今この『禅海一瀾』を編述しようとする志も、全くここに基づいている。

どうぞ道を学ぶ者は、「至誠息むことなし」という言葉の深い味わいを充分に噛みしめてもらいたい。この味わいを深く自得すれば、わが禅門にいう「正念工夫不断相続」の力を得、悟りの境地が日常生活の上に真に生かされるであろう。

* * *

洪川老師は『禅海一瀾』の中ではこのように述べているが、後にそれでもなお足らずとして、「性誠の論」を著した。それは「至誠」の一語は儒教の核心に他ならぬからであろう。

次に、その「性誠の論」を拝読したい。原文は勿論漢文であるが、これを現代文に直してご紹介することにする。

二、性誠の論（『蒼龍広録』より） 現代語訳

性は誠である。これを尊崇して、至誠といい、徳性といい、正法眼蔵といい、一真法界という。つらつら考えるに、性誠の外に神道は無く、性誠の外に儒教は無く、性誠の外に仏法は無い。

性誠の徳の広大にして甚深なることは、上は非々想（非有想非無想天の略）より、下は奈落のどん底まで満ち満ちて、余すところが無い。天が覆い、地が載せ、日月が照らし、霜露が墜ちたりすること、四季の移り変わり、万物の消息など、皆この性誠の徳の作用である。

ものというのは、虚にして靈、寂にして妙であり、万物であることを味くらますものではない。ものというものは全てそのように偽り（妄）がない。ただ一物がその中であつて主宰となつて、大道を成就している。これは果して何であるか。大いに問題となるところである。

禅宗の初祖達磨大師の言われた見性ということこそ、その性誠がどのようなものであるかを明了にする所以のものに他ならない。『中庸』には「至誠息むことなし」とあり、また「誠は天の道なり。これを誠にするは人の道なり」とある。「これを誠にする」というのは、明了にした上で、これを実行することと言うのである。そうならば、これを誠にすることが出来なければ、天道と人道とふたつながら失ってしまうことになり、大いに人が最も靈性的存在であるという意義に背くことになる。それ故、孔子はこれを「百姓ひやくせい」と呼び、釈尊は「衆生」と呼んだのである。

仏祖や聖賢が蒙昧もうまいな民と異なる点は、外ではない。ただ自らこれを誠にして、それを他の人にも及ぼすからである。孔子が「吾が道一もつてこれを貫く」と言われ、釈尊が「ただこの一事のみで、その他の二つは真実ではない」と言われたのは、皆これを誠にすることの至言である。顔回の（これは「孔子の」の

誤り）「肱を曲げてこれを枕とする」ことや迦葉尊者の破顔微笑は、これを誠にするの妙用である。孔子が匡に畏れず（世を正すことを畏れなかったの意味か）、釈尊が夜叉に我が身を投じたのは、これを誠にすることの大用である。曾参の「手を啓け、足を啓け」や、唐代の禅僧巖頭が賊のために首を切られて、その折りの一喝が数十里に聞こえたというのは、これを誠にすることの余力である。孟子が戦国時代にあつて、独り覇道の行き方を排斥・論駁して、堯舜の道を称揚し、迦那提婆尊者が西天にあつて外道を折伏して、仏祖の道を大いに広めたのは、これを誠にすることの余勲である。

およそ仏祖や聖賢と言われる人達は、性が決定けつじようしている。外界によって惑わされず、情のために牽かれず、危難に際しても微動だにしない。これを性誠というのである。神や仏陀や聖賢が教えを立てられたのも、この性誠出るものではない。

三綱・五常・六波羅蜜・八正道は、綱に目があるようなものである。ただひたすら自己の性誠を明了にして、その後、日頃の行動の中でよく鍛錬して修めてこれを誠にすることは、ちょうど大綱（大まかな方針）を取り決めれば、それによって細目は自然と出来上がるようなものである。そうすれば、行なうところ仁でないことは無く、行なうところ義でないことは無く、行なうところ持戒でないことは無く、行なうところ禪定でないことは無い。心性はいずれも徹底し、体用は同一の根源をもつ。つまりはこの性誠に帰着するのである。宋代の儒者は本然の氣質を論じて性に二種類あるといっているが、それが凡庸な説であり、共に論ずるに足りない者と言うべきである。

わが禪門では、若年にして書物を放擲ほうてきして専門道場に入り、十年・二十年と幾多の艱難辛苦を喫し、一大事因縁を参究するのは、ただ行解ぎょうげ（法理と実践）が純真な性誠に心境に到達せんがためである。

私は二十五歳にしてこの事じあるを知り、二十七歳にして真面目を徹見し、四十四歳にしてこの寺の住職となった。今年不惑の歳を八つ越える年齢になったが、その間二十数年、時々刻々に心を養い省察し、専一に護持してきたが、如何せん、才が拙い故に速やかに仏祖穩密純真の心境に至ることが出来なかったが、ここ四五年来、ようやくにして徹底して正念工夫不断相続の絶妙な境地を悟ることが出来、初めて心知百体が純真性誠の本来の心境に到達することが出来たと感ずるようになった。それ故、最近『禪海一瀾』を撰述して至誠の一節において、おおよその思いを述べたのである。とはいえ、いまだ充分ではないので、今この論を述べるのである。

これを正念工夫の一著といい、実にわが禪宗の末後の険峻な難関である。たとえ聖賢や諸子百家の書物を暗誦して、ことごとくその意味を理解することができ、祖師方の入り組んだ公案を透得して、ことごとくその真意を会得できたとしても、この純真な至誠という本来の境地を見過くす者は、卓越した古人（古徳）もこれを腐乱して膨ふくれ悪臭を放っている死体に異ならぬ輩と呼んでいる。

もし真箇に大道を修しようとする上々の機根の人物ならば、黙々として自ら知り、道の醍醐味の奥深いことを味わい尽くして、名利を追い駆けたり、利益をむさぼったり、話しのねたにしたり、慢心を起したりしてはならぬ。ただただ自らを反省して密かに修して密かに働き、悟れば悟るほど参究せねばならぬ。

このようにすれば、自然に純真な至誠の心境に到り得ることができ、自分の足元に必ずや眼を見張るような体験があるであろう。

わが禅門で向上に至れば、五位十重禁戒の調べが授けられるのはこのためである。歴代の祖師方が深くこれを秘して容易に見せられなかったのは、ただ知見が広大で行ないが純真な上々の人物を求めたがためであった。古人は「大法はそれを受け取るだけの器が無い者には、決して説いてはならぬ」と言われた。それは何も宝物のように人に見せるのを惜しむというのではない。ただ相似の輩（にせもの）が出て、曇っていない人の眼をも台無しにしてしまい、正しい仏法を地に落としてしまうのを、恐れるがためである。

このような私の論を見て、あるいは「虚舟（洪川老師）は老婆親切で、三隅を挙げている」（注1）という者もあろう。

ただ老胡の知を許して、老胡の会を許さず（注2）

（注1）「三隅を挙げている」

この「三隅」というのは、『論語』述而篇が典拠であり、「一つの隅を取り上げて示す」とあの三つの隅で答えるというほどでないと、反復することをしない」という文脈から採られている。

ここで洪川老師が言わんとするのは、あまり老婆親切に説き過ぎではないかとの批難を念頭に置いていることであろう。

（注2）「ただ老胡の知を許して、老胡の会を許さず」

「老胡」というのは老練な胡の人であった達磨を意味していると考えられるから、転じて達磨を初祖とする禅宗のことを指すと見なしてよい。

それ故、禅でよく使われるこの語句は、「私がどれほど奥義を説いて見せようが、その体験の無い者には分かるものではないから、何も天機「極意」を漏らしたなどと色めきたつことは無い」というような意味であろう。

結び

以上が洪川老師の至誠論である。

「至誠」ということが東洋の諸道の根本になっている点が、理屈だけではなく、その深い禅体験から明確に説かれている。大拙居士が洪川老師を「至誠の人」と呼んだのは、誠にもっともなことである。

参考文献 今北洪川『禅海一瀾』（盛永宗興訳・柏樹社刊）

この文章の無断複製・転載を禁じます

著者 田中寛洲